

屏風に押す色紙染分の事

今案に屏風に押色紙がたは二枚づゝ並べて張て色は二色に染分るなり御所方の御屏風を拜見せしにみなその定也今年安永五年三月廿一日御室御座敷拜見せしに堂上方寄合書の中屏風を立られしも右の如し經師家の傳に長角半と云張様ありといへども古へはさのみその定も聞えずことに此にいへる五色なりとて黒く染たらんには墨にては物かくべからずわけもなきことなり

〔貞丈雜記家作十四〕一古の屏風の繪に扇ながし扇づくしといふ事あり扇ながしと云ふは流水に扇をいくらも書きたるなり扇づくしと云ふは水はなくて扇計いくらも書きたるなり其の扇の面に色々の繪様を書くなり

〔明月記〕寛喜二年六月廿一日辛巳十三日行幸略中 屏風四帖略中 一以護袋爲色紙形一押扇紙

〔古今和歌集雜十七〕たむらの御時に女房のさぶらひにて御屏風のる御覽じけるに瀧おちたりける所おもしろしこれを題にて歌よめとさぶらふ人におほせられければよめる

三條の町

思ひせく心の中のたきなれやおつとはみれど音のきこえぬ

屏風のるなる花をよめる

つらゆき

咲初し時よりのちはうちへて世は春なれや色のつねなる

〔古今著聞集十一〕帥のおとゝに屏風を賣人有けり公茂弘高などに見せられけり公茂弘高をまねきていひけるは此野筋此松汝及べからずおそらくは公忠がかく所か弘高承伏しけり公茂が云公忠は屏風をかくとは必ずその屏風のひらのすみごとにおのれが名をかけりこゝろみにはなちて見るにあんのごとく公忠が字ありけりいみじかりける事也